ベギンとマイスター・エックハルトの聖職者批判

中　川　憲　次

はじめに

マイスター・エックハルト（1260頃—1327）はベギンの作品を読んでいたであろうか。たとえば，エックハルトがマグデブルクのメヒティルト（1209頃—1280／1294）の作品を読んでいたかどうかについては，すでにFrank Tobinが，『マイスター・エックハルトとベギン神秘主義[1]』所収の論文「マグデブルクのメヒティルトとマイスター・エックハルト」において，Oliber Daviesの論証を引用しながら，その可能性を認めている[2]。Oliber Daviesがその著『神秘主義の神学者マイスター・エックハルト[3]』で行っている論証を箇条書きにすると，以下のようになる。

①メヒティルトが暮らしたマクデブルクとヘルフタが両方ともエックハルトが青年期までを過ごしたエアフルトに比較的接近していること。

②メヒティルトがその作品を物すのに用いた言語は当時の方言であり，それは，彼自身サクソン人であったエックハルトにとって理解し易かったであろうということ。

③メヒティルトの作品『神性の流れる光』の重要なラテン語の翻訳が，エックハルトの時代に上梓されたこと。

④ドミニコ会が『神性の流れる光』という書物の最初から後々までの運命に明白に関与しているということ。

⑤エアフルトのエックハルト自身の修道院とメヒティルトを関係づける証拠としての，アポルダのディートリヒという人物の存在。ディートリヒの作品には件の『神性の流れる光』のラテン語訳からの引用が含まれていた。この人物は1228年頃の生まれで，1298年頃死んだと言われており，1287年から1297年までエアフルトのドミニコ会修道院で過ごしており，エックハ

ルトがそこで過ごした1294年から1302年という時期と重なっている。

また，ベギンに対する迫害が激しくなった1310年6月1日に，パリで火刑に処せられた神秘家マルグリット・ポレットもエックハルトと関係の深いベギンである。神秘主義研究の第一人者バーナード・マッギンはその著『神秘主義の開花』において「フランスのベギン（＝マルグリット・ポレット）のテキストが，マイスター・エックハルトによって知られ，使われたことはほとんど確かである[4]」と書いている。彼女が火刑に処せられた翌年の1311年，エックハルトはパリで教師として日を送っていた。エックハルトがポレットの『単純な魂の鏡』を読んでいたことは充分考えられることである。

上記のごとき可能性を，我々はベギンとエックハルトの主著を比較・検討することによって確かめ，さらに「聖職者批判」という契機がエックハルトのベギン会修道女達との関わりにおいてどのように働いたのか，考察したい。

1　当時の世俗の聖職者批判的な言葉

まず，我々は当時の世の中が聖職者の腐敗をどのように見ていたのかを，当時の文学作品を通して探ってみたい。

1．1　ハルトマン・フォン・アウエ（Hartmann von Aue＝1165頃—1110／20）

中世盛期のドイツの物語作家にして詩人であるハルトマン・フォン・アウエの叙事詩『グレゴーリウス』は主人公グレゴーリウスの数奇な運命をダイナミックに描いている。グレゴーリウスの両親はある公国の国王の長男長女，つまり兄妹であった。すなわち，グレゴーリウスは近親相姦の結果生まれた子であった。すぐに父は死に，母はグレゴーリウスを，出エジプト記2章のモーセのように，籠に入れて捨てる。ある漁師夫妻に拾われたグレゴーリウスは，やがてある修道院長に育てられることになる。グレゴーリウスという名は，その修道院長の名を継いだのである。しかし，自分がその修道院長の子ではなく，実の両親の近親相姦の結果生まれた子であることを偶然知ることとなったグレゴーリウスは，騎士となるべく旅に出る。やがて，立派な騎士となったグレゴーリウスは，近隣の国から攻められている女王の国を助け，

結局その女王と結婚する。しかし，またもや偶然その女王が自分の母親であることを知り，あろうことか自分自身が実の母親と近親相姦を犯したことに気づく。知らぬこととは言え，己が犯した罪の深さに恐れ戦いたグレゴーリウスは懺悔の旅に出る。その旅の果てに，グレゴーリウスは海中に浮かぶ孤岩に17年間座り続けることとなった。後は，中島悠爾氏の訳で引用しよう。第５章の3137行から3170行までである。

> 世の安らぎに見捨てられたこの男は，十七年の歳月を，孤岩にすわりつづけたのだ。そして神もまた，やがて彼の恐ろしい罪を忘れ，恵みをたれ給わんとしたちょうどその折，ローマの教皇が亡くなられた，と記し伝えられている。教皇が息を引きとられるや，ローマの人びとはそれぞれに，この高い位の後継者に，おのが縁者を送ろうと，互いに争い合うのだった。争いは争いを呼び，互いのねたみと野心に妨げられて，いったい，だれにこの聖座を委ねるべきか，もはや決めかねる仕儀とはなったのである。ついに一同は，この選択を，主なる神に委ねようと決心した。『主よ恵みをたれ給い，この世の摂政にふさわしい者を，われらに告げ知らしめ給え』と，彼らは願うのであった。ミサがとり行なわれ，捧げ物と祈りとに，彼らはみな励んだのだ。心正しきものの祈りを，常に聴き入れ給う主なる神は，このたびも，恵みをたれ給うた。すなわち，ある夜，主なる神は，二人の経験豊かなローマ人の枕辺に，おのが意志を告げ給うた。かねてより，この二人の心の正しさは広く知られ，彼らの語るひと言ひと言が，神への誓言に等しいと言われるほどであったのである。(5)

ここに当時の聖職売買の様子が如実に描き出されている。聖職売買とは正に「(教皇という) 高い位の後継者に，おのが縁者を送ろうと，互いに争い合う」ことであった。そして，民衆の切なる願に答えた神が「二人の経験豊かなローマ人に告げた」という「意志」とは，父母と自分の二重の近親相姦に対する贖罪の歩みの果てに「十七年の歳月を，孤岩にすわりつづけた」グレゴーリウスを教皇に選ぶべしということであった。このくだりは，当時の聖

職売買をめぐる状況のすさまじさを教えてくれる。

1．2　ダンテ アリギエリ (Dante Alighieri＝1265—1321)

ダンテの『神曲』地獄篇に聖職売買が登場する。以下，平川祐弘氏の訳で引用したい[6]。まずは地獄篇第11歌から。

この後者は人間本来の愛のきずなを断つだけだ，
だから第二の圏谷（たに）に巣喰う者には偽善，阿諛追従，魔術魔法，
虚偽，窃盗，聖職売買，女衒，汚職，乃至は類似の汚れが挙げられる。

地獄篇　第11歌55—60行

この箇所は，ダンテがウェルギリウスから地獄の分類を聞いているところである。この場面が第六の圏谷であるから，ここから数えて「第二の圏谷(たに)」とは第八の圏谷である。第八の圏谷には10の悪の濠があり，その中の第三の濠に我々の関心のある「聖職売買」が本格的に描かれているのである。以下で，その箇所を読んでみたい。

おお魔術師シモンよ，おお哀れなシモンの徒よ！
本来は美徳と結ばれてその花嫁となるべき
聖物や聖職を，おまえら盗人は
金や銀と引き換えに売りひさいでいる。
おまえらが第三の濠にいる以上，
いまこそ宣告のラッパが高鳴ってしかるべき時だ。

地獄篇　第19歌１—６行

まずこのように，新約聖書に出てくる魔術師シモンが登場するのである。このシモンは使徒言行録８章19節において，イエスの弟子であるペトロとヨハネがサマリアの人々に聖霊を授けたのを見て，金を持ってきて「わたしが手を置けば，だれでも聖霊が受けられるように，わたしにもその力を授けてください」と言った男である。この行為に対してペテロは次のように答えて

いる。「すると，ペトロは言った。『この金は，お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。お前はこのことに何のかかわりもなければ，権利もない。お前の心が神の前に正しくないからだ。この悪事を悔い改め，主に祈れ。そのような心の思いでも，赦していただけるかもしれないからだ。お前は腹黒い者であり，悪の縄目に縛られていることが，わたしには分かっている。』（8章20節—23節）」。この聖書の記事から，聖職売買がシモニーと呼ばれるようになったのである。それ故に，ダンテも「おお哀れなシモンの徒よ！」と言っている。

さて，シモンの徒の地獄でのありさまは次のようである。

見渡すと両の斜面も，その底も
一面に鉛色の石でそのいたるところに
一様に円い穴が幾つも幾つもうがたれていた。

フィレンツェのサン・ジョヴアンニ〔洗礼堂〕の
洗礼用につくられた鉢と
見た目には大差がない。

その洗礼盤の一つを，まだ数年も経たぬ前のことだが，
私が毀した。溺れかけた子供を救おうとしたのだから
この言葉を証にみな誤解をといてもらいたい。

さてその穴のどの口からも逆立ちした罪人の
足と脛とが脹脛のところまで
突き出していた，あとの残りは穴に埋ずまったままだ。

みなの足の真には左右ともに火がついていた，
関節をはげしくばたつかせるから，
細枝や緒も断ち切ってしまいそうな勢いにみえた。

油がしみついたものに火がつくと
炎はきまって表面だけを走るものだが，
踵から爪先にかけて炎が走る様もそれと似ていた。

地獄篇　第19歌13—30行

シモンの徒は，穴に頭をさかさまに突っ込んで，穴の外に出た足をばたつかせているのである。ダンテはその一人に語りかける。

「ああ誰か知らないが，上下逆さまに
まるで柑みたいに刺しこまれた哀れな魂よ」
と私が話しかけた，「なにか言えるなら，口を利け」

地獄篇　第19歌46—48行

それに対してシモンの徒が答える様をダンテは次のように描いている。

すると亡者は両脚を稔じまげて身悶えし，
溜息をつき，泣き声をたてていった，
「それでは私から何を訊き出そうというのだ？
私が誰かそれが知りたくて
わざわざ堤を越して来たというのなら，
教えてやろう，私は生前大きな法衣をまとっていた。
事実，私は熊の子なのだが，
子熊たちを出世させようという欲にかられて
現世では金を，ここでは自分を財布につめこんだ。
この私の頭の下には私より前に聖職売買をやった
ほかの法王どもが引きずりこまれて
岩の裂け目に隠れてうずくまっている。
私が先刻性急な質問をした時は
おまえを別の男と勘違いしたのだが，そいつが来れば
その時は私もまた下へ落ちるはずだ。

だが私がこうして上下逆さに押し込められ
両足を焼かれるようになってからもう長い時が経った。
だからそいつは来てもそう長く赤い足で逆立ちはすまい。
そいつの後から西から無法な王が来るだろう，
することなすことが輪をかけて邪悪だから
これにはそいつも私も及びがつかぬ。
マカベヤ書に出てくるヤゾンの再来といおうか，
ヤゾン打たいして〔シリアの〕王が軟弱だったように
フランス王も奴に対してはだらしがないに相違ない」

地獄篇　第19歌64—83行

78行の「西から来る無法な王」とはクレメンス５世のことである。このクレメンス5世こそ1311年から1312年にかけて開催されたヴィエンヌ公会議を召集した人物である。この公会議で出された教書 cum de quibusdam mulieribus によって，ベギン迫害は決定的になったのである。

さて，このシモンの徒に対して，ダンテは次のように断定的な言葉を浴びせる。

「さあ，ひとついってもらおう，
〔天の王国の〕鍵を聖ピエトロに委ねる前に
わが主〔キリスト〕が金をいくら要求されたか？
『我に従ひきたれ』求められたのはこれだけだ。
裏切者〔ユダ〕がその職を失った後
かわってその〔会計の〕任に選ばれたマチアから
ピエトロにせよ誰にせよ金銀を受けとったためしはない。
おまえはそこに居残るがいい，罰が当たったのだ，
悪く手に入れた金だ，良く番をしろ，
金のためにおまえは不敵にもシャルル王にたてついた。
おまえが現世で握っていた
尊い鍵にたいして敬意を払えばこそ

まだロをつつしんでいるのだ，さもなければ
なお一層痛烈な言葉を使うところだ。
なにしろおまえらの貪欲のために
善人が沈み悪人が浮ぶ悲しい時世となった。
四海に君臨する女〔ローマ〕が
諸国の王と淫をひさぐさまを見た時，
ヨハネはおまえらのような法王の出現を予見していた。
その夫〔法王〕が美徳を慕っていたかぎりは
七つの頭をもって生まれた女〔ローマ教会〕は
十の角〔十戒〕を証に栄えることができた。
おまえらは手前勝手に金や銀の神々を造りあげたが，
おまえらと偶像崇拝の徒とどこがどう違うというのだ？
偶像を一つ拝むか百拝むかの違いだけではないか？
ああコンスタンティヌスよ，おまえの改宗を悪いとはいわぬ，
お前が貢いだからついに成金の法王が世に出たのだ！」

地獄篇　第19歌90—117行

「なにしろおまえらの貪欲のために／善人が沈み悪人が浮ぶ悲しい時世となった」とは，言い得て妙である。この断定は聖職売買の弊害を的確に表現していると言えよう。

1．3　ジョヴァンニ・ボッカチォ (Giovanni Boccacio＝1313—1375)

ダンテと同じくイタリア人の作家ボッカチォの『デカメロン』に決定的な聖職者批判の言葉がある。好色な修道士アルベルとが天使の姿に紛争してある女性と情事を重ねるという内容の，第4日目第2話から野上素一氏の訳で引用しよう(7)。

世間の人はよくある諺をつかいます。それは『悪人のくせに善人と思われている人は，悪事をすることができ，犯人とは思われない。』というのです。この諺は，私に出された主題について奇話をするのに広い材料を

与えてくれますし，また宗教人の偽善がいかに多く，いかなる種類のものかを示すのにも役立ちます。宗教人は幡広く長い衣をきて，わざと蒼白い顔をし，他人に何か頼むときは，へり下った柔和な声を出し，自分の犯している同じ他人の悪徳をあばきたて，また，自分は布施をとり，他人は布施を出すことによって救いを得られると教えるときは，かん高い物凄い声を出し，それだけでなく，私たちのように天国を追い求めるのでなく，ほとんどその持主か領主のような顔をして，死んで行く人に対して，彼らが自分に残した金額によって天国の高い場所や低い湯所を与えるという風で，かくしてもしそう信じているなら第一に自分自身を，また次にそのような言葉を信じている人たちを騙すのに努めているわけです。彼らについて，私が必屢なだけ話してよいのでしたら，単純な人たちに，彼らの幡広い法衣の中にかくしているものを，すぐさま云ってきかせるのですが。しかし今私は，この人たちに，神さまのお恵みで，彼らの虚偽にかんして，一人の聖フランチェスコ教団の修道士に起ったとちょうど同じことが起ればよいなと思っております。

七人の淑女たちの中で最年長の28歳のパンピネアは以上のように話し始めたのである。彼女は続いて独りのフランチェスコ会修道士の話を展開する。曰く，

いともすぐれた御婦人がた，さてイモラという町に馬鹿げた放埒な生活を送っていた男がおりました。その男はベルト・デラ・マッサと呼ばれていました。彼の不真面目な行為はイモラの人にはよく知られていましたので，彼が言うことは，嘘ばかりでなく，本当のことでもイモラでは誰一人として信じるものがありませんでした。そこで，ここでは彼の悪計はもはや通用しないと分ったので，途方にくれた者のように，あらゆる悪事の歓迎者であるヴィネージャに移転して，そこでよそではやらなかった悪事の新らしい方法をみつけようと考えました。そこで自分が過去に犯した悪事に良心が責められて非常に深い謙遜の心に圧倒されたかの如くによそおって，他の誰よりも信心深くなり，小さい教団の修道士

となって修道士アルベルト・ダ・イモラと呼ばれるようになりました。さてこんな服装をして，うわべは厳しい生活をなし，贖罪や食禁を賞めたたえ，ほしくないときは肉も食べず，葡萄酒も飲みませんでした。そして，誰か人がくるとたちまち大泥棒，女衒，詐欺師，人殺しからただちに大説教師に早変りしました。それだからといって，人知れずやりうるときは，前に述べた悪い癖を出さないわけではありませんでした。そればかりでなく，司祭になってからも，いつも祭壇でミサをあげるとき，多くの人から見られていると，救世主の受難に封して，必要なときはなんなく涙を流せる人の如く泣いたのでありました。そして，要するに，説教と涙で，ヴィイネージャの人をこのようにして篭絡してしまいましたので，ほとんどそこで作成されるすべての遺言状の受遺者または受託者になり，多くの人の金銭管理人となり，ほとんど大部分の男女の聴罪師や忠告者となったのでございました。このようにして，狼は牧者となり，この辺での彼の聖性の名声はアシェージの聖フランチェスコよりはるかに高いものでありました。

ここでは，聖職売買に限るのではなく，一般的な聖職者や修道士の腐敗が，庶民の感性で活写されている。当時の聖職者の不誠実な信仰もどきが見事に暴き出されている。聖職者の名を借りた恐ろしい人間どもが，「すべての遺言状の受遺者または受託者になり，多くの人の金銭管理人となり，ほとんど大部分の男女の聴罪師や忠告者となった」ような事態は，ボッカチォ当時のイタリアに散見されたのであろう。

ついでながら，『デカメロン』の序から引用しておきたい。そこには，当時のイタリアの女性が置かれていた立場に対するボッカチォの，ある眼差しが感じられるからである。その眼差しに，我々はベギンに対するエックハルトの眼差しと同じものを見るのである。長くなるが，柏熊達生氏の訳で序から引用したい[8]。ボッカチォは「苦しみなやむ人々に同情することは人の常です。それはどなたにも，そうあってほしいことですが，今までに慰めを必要とし，だれかからその慰めを得た人々には，特別にそうあっていただきたいところです」と切り出した後，当時の恋する女性たちが慰めを必要としてい

ると言う。故にボッカチォは，彼女たちと，それを取り巻く男性たちの状況を活写するのである。曰く，

> 彼女たちは，父母や，兄弟や，夫たちの希望や意向や命令によって，抑えられていて，自分たちの寝室の小さな場所のなかにとじこもって，大部分の時をすごしているのです。そしてほとんど何もしないで，すわったまま，一時にあれやこれやと胸をおどらしながら，ひとりで，かならずしも陽気なものだとはいえないいろんな思いに，ふけっているのです。そのために，燃えたぎる欲望に動かされて，ふさぎの心が彼女たちの胸のなかに生まれますと，それは新たな考えによってふたたび遠ざけられないかぎり，その胸のなかにとどまって，彼女たちがそれにたえる力は男たちよりもはるかに弱いものであることは別としましても，それは本当に苦しいものです。こんなことは，恋する男たちにはないことを，私たちはよく知っています。彼らは，ふさぎの心か，苦しい思いが自分たちをさいなむ時には，それをやわらげたり，はらいのけるたくさんの方法をもっています。望みさえすれば，彼らにはそこいらを散歩するなり，多くのことを聞いたり見たり，鷹狩りに興じたり，獣を追ったり，魚をとったり，馬に乗ったり，かけごとをしたり，商売をしたりするといった方法にこと欠かないのです。こうした方法にはいずれにしろ，彼らの心のすべてを，もしくは一部を引きつけておいて，すくなくともいくらかの間は，苦しい思いを他へ転ずる力があって，そしてその後はいろいろの方法で，心に慰めが生まれたり，苦しみがへったりするものでございます。

エックハルトが説教で成し遂げようとしたことを，ボッカチォは物語で行ったのである。

1．4　ウイリアム・ラングランド（William Langland＝1330頃—1387頃）

14世紀から15世紀のイギリス庶民の様子を活写した，下級修道士ウィリアム・ラングランドの『農夫ピアズの幻想』にも聖職売買は登場する。池上忠

弘氏の訳で，第2歌を引用しよう[9]。

「『明日〈報酬〉嬢と〈虚偽〉との結婿式が行なわれることになっていますが，実は〈追従〉が言葉巧みに二人の縁結びをたくらんだのです。〈欺瞞〉に彼女は彼の願いをすべて聞き入れるよう，すでに説きふせられていて，ついで二人が一緒に寝るようになったのはすべて〈うそつき〉の手引きだったのです』。『明日，私がお話ししたように，結婚式が行なわれますが，そこでお前にその気があれば，あの領主の支配下にある者は，賤しい者も高貴な者もすべて，どういうやからであるか，知ることができるでしょう。できればそこで彼らの本性を知り，〈真理〉とともに至福のうちに生きたいつもりならば，彼らすべてを遠ざけるようにしなさい。もうゆっくりしているわけにいきません。お前を主の御手に委ね，どんな貪欲をも物ともせず敢然とお前が善き人になるよう勧めます』。〈虚偽〉と共に権勢を振っている裕福な従者たちは皆，花婿側も花嫁側も結婚式に招かれていた。〈聖職売買〉卿は，〈虚偽〉と〈追従〉両名がいかなる額の謝礼上納金をも負担して，所有している財産証書に印を押し，それを結婚に際して〈報酬〉に永久に贈与するため呼び寄せられていた。」

ここには，「報酬」嬢が登場している。この「報酬」という概念こそは，ラングランドが最も憎むものである。ラングランドは，農夫の自給自足の生き様に理想を見て，民衆一般的における報酬概念の弊害を考えているようである。しかし，我々がここで問題にしたいのは，聖職者の問題である。

ところで，聖職者の原型はイエスの弟子たちであろう。共観福音書のイエスによる弟子派遣命令は，聖職者の受け取る報酬についても触れている。マタイによる福音書10章10節には「働く者が食べ物を受けるのは当然である」とあり，聖職者の受け取るのは金銭ではないことが分かる。しかし，ルカによる福音書10章７節では「働く者が報酬を受けるのは当然である」となっている。これらの聖書箇所で，まず印象的なのは，福音を宣べ伝えるという業が，報酬を受け取るべき労働と捉えられている点である。原始キリスト教時代から，聖なる業が，既に俗なる報酬を受けて当然とされていたのである。

次に，その報酬が「食べ物」であるのか，金銭的「報酬」であるのかが問題となる。マタイによる福音書によれば日々の糊口を凌ぐための「食べ物」だけは許されることになり，ルカ福音書によれば金銭的報酬も許されることになる。ラングランドの見解は，マタイによる福音書の見解に繋がり，ルカによる福音書の「報酬」を否定していると言えよう。そして，聖職売買こそは，聖職に就けば金銭的に潤うということを前提とした上で，その甘い汁に群がる行為である。それ故，貨幣経済の勃興と共に，〈報酬（Mede）〉という概念が幅を利かせつつあった中世末期のイギリスにおいて，聖職売買(Symonye)は擬人化するとき，もはや卿（Sire）の位を得ていたのである。

2　当時の教会側の聖職者批判的な言葉

まず，教会の支配体制が聖職者の腐敗をどのように見ていたのかを瞥見したい。聖職売買はカルケドン公会議で既に取り上げられていたが，10世紀になってドナティスト論争的な側面から再度問題視された。たとえば，第4回ラテラノ公会議（1215年）決定の63章は次のように言う。

> 多くの地方において，多くの人々によって，ちょうど神殿で鳩を売っている人々のように，司教の聖別，大修院長の祝別，聖職者の叙階のために，金銭を要求したり強要したりしてい　る。また，誰が誰にどれだけの金額を支払うべきかが定められている。さらに，悪いことには，一部の人々は，そうすることが古くから守られてきた習慣であると言って，このように腐敗した悪弊を弁護している。このような悪習を廃止するために，授与する者も授与される者も，たとえどのような名目であっても，金銭その他のものを要求または強要してはならないことを厳重に法として定め，そうすることを完全に禁止する．このような金銭を提供する者も，それを受取る者も，ギェジ（列王記下5・20～27参照）やシモン（使徒言行録8・9～24）が排斥されたように，排斥される。(10)

ここから，「司教の聖別，大修院長の祝別，聖職者の叙階のために，金銭を

要求したり強要したり」することが如何に一般化していたかが分かる。そして，そのような行為を「腐敗した悪弊」と断じ，「完全に禁止」している。そのさいもちろん，すでに我々が引用したダンテの『神曲』に登場していた使徒言行録のシモンにも言及されていた。

次に，トマス・アクィナス（1225頃—1274）の『神学大全[11]』から私訳で引用したい。

2-2 q.100 a.1 「聖物売買とは何らかの霊的なもの，もしくは霊的なものに結びついたものを買い，もしくは売ろうとする熱心な意志であるか (Utrum simonia sit “studiosa voluntas emendi et vendendi aliquid spirituale vel spirituali annexum”)」

2-2 q.100 a.1 「七についてはこういわなくてはならぬ。教皇は他のいかなる人間とも同じように，聖物売買の悪徳に陥ることが可能である。(中略) もしかれが何らかの霊的事物のために或る教会の収入から金を受けとるならば，聖物売買の悪徳を免れないであろう。また同様に，或る信徒から教会の財産に属するのではない金を受けとることによっても聖物売買の罪を犯すことが可能であろう。(AD SEPTIMUM dicendum quod Papa potent incurrent vitium simoniae, ……. Et ideo so reciperet pro aliqua re spirituali pecuniam de redditibus alicuius ecclesiae, non careret. Vitio simoniae. Et similiter etiam posset simoniam committere recipiendo pecuniam ab aliquo laico non de bonis Ecclesiae.)」

2-2 q.100 a.2 「(前半略) 五についてはこういわなくてはならぬ。司教職あるいは何らかの教会内の高位ないし職俸における権利が，選挙，任命あるいは寄付によって或る人の手に入る前は，対立者の妨害を金銀によって切りぬけることは聖物売買の罪となるであろう。(後略) (……. AD QUINTUM dicendum quod antequam alicui acquiratur ius in episcopatu, vel quacumque dignitate seu praebenda, per electionem vel provisionem seu collationem, Simoniacum esset adversantium

obstacula pecunia redimere: ……)」

2-2 q.100 a.3 「(前半略) 説教者たちに現世的なものが与えられるべきであるのは，説教者たちの生活を支えるためであって，説教の言葉を買うためではない。(中略)。こうした (現世的な) もののために説教が為されるというふうに福音は売物ではない。(中略)。もしこうしたことが契約が介在することによって為され，あるいはまた買い・売りの意図をもって為されるのであれば，聖物売買となるであろう。(後略)。(……Praedicantibus etiam temporalia debentur ad sustentationem praedicantium, non autem ad emendum praedicationis verbum. ……: non tamen venale est Evangelium. ut pro his praedicetur. …… Si autem huiusmodi pacto interveniente fiant, aut etiam cum intertione emptionis vel venditionis, simoniacum esset. ……)」

このように，トマスにおいても simonia は，まず物のように福音を売り買いすることを意味していた。聖職者が金銭を第一義的に目的として説教することが simonia であり，そこから，聖職売買も simonia となった。両者とも，同じ根を持つ行為だからである。また，トマスの理解は，聖物売買を simonia としていたダンテの理解とも通じるところがある。聖遺物を売買する聖物売買は聖職売買と同根だからである。

3　ベギンとエックハルトによる聖職売買に関する批判

上記のような状況下，ベギンとエックハルトは聖職者の腐敗に対してどのように語ったかを，それぞれの主著から探ってみたい。

3．1　マグデブルクのメヒティルトの場合

メヒティルトは修道院に入りたくても入れず，マグデブルクのベギン共同体に加わり30年以上そこに留まったベギンである。フィオーレのヨアキムを思わせる預言を含むその言辞は具体的で激しく，当時の聖職者を批判して苦

境に立つが，ヘルフタの修道院に逃れて命を全うした。まず，その著『神性の流れる光』の第4部第9章「聖職者たち〔が受け取る〕四種の寄進」を，植田兼義氏の訳で引用する[12]。

> このあと，わたしたちの主は，聖職者の受け取る寄進は四種にかぎり，それ以外のところからは受けてはならないと言った。(中略)〔収穫の〕田畑において，聖職者は自分に捧げられるものを受け取らなければならない。選んだり，要求したりしてはならない。(後略)。

ここから，聖職者の中に寄進を「選んだり，要求したり」する者がいたことが分かる。また，第4部第10章「一般信徒の分に応じた寄進」[13]には次のようにある。

> 寄進する一般信徒は，聖職者があくどい強欲に用心しなければならないように，寄進のさいには卑劣なもの惜しみをしないように気をつけなければならない。(中略)聖職者は謙虚な畏れと心を震わせる思いで神の御手から拝し，すべての行ないにおいて神に賛美しながら再びお返ししなければならない。(後略)。

ここからは，「謙虚な畏れと心を震わせる思いで神の御手から拝」するように寄進を受け取る聖職者が少なかったことが窺える。
次に，第5部第14章は「悪い司祭の煉獄について」と題されている。そこには，憐れむべき司祭の姿が描かれている[14]。

> 煉獄の火を見たのはずっと前のことだった。それは燃えている海面のようであった。そして，真っ赤に熔けた釣り鐘の材料のように沸騰し，上のほうは薄暗い霧で覆われていた。その水の中には，人間の姿に似た魚が泳いでいた。これは，この世ですべての快楽を求め，貪欲に人生を送り，呪わしい不純なことにはげしく燃えて，目をくらませて，何もよいものを愛することができなかった，あわれな司祭の魂であった。たぎる

水面を漁師が行く。彼らは舟も網ももっていない，彼らの燃える爪で魚を捕っていた。というのは，彼らは悪霊，悪魔だったからである。魚を陸地にもって行くと，魚の皮を恐ろしい仕方で剝ぎ，すぐ，沸騰する鍋の中に投げ込み，その中へ，燃えるフォークを突き入れた。それから，頃合をみて，煮上がってから，そのくちばしで食べてしまった。このあと，悪魔はふたたび海面にでかけ，その尻から排泄して，また，捕えて，煮て，食って消化してしまった。

この司祭は「この世ですべての快楽を求め，貪欲に人生を送り，呪わしい不純なことにはげしく燃えて，目をくらませて，何もよいものを愛することができなかった」が故に，悪魔に食べられてしまったのである。

次に，第6部第1章「所属する聖職者に対する修道院長，女子修道院長，高位の聖職者の心横え」(15) には次のようにある。

権力には大きな危険がある。「あなたがたは高位の聖職者，修道院長，女子修道院長です」と言われるとき，ああ，まことに，あなたは試みられている。その場合，謙虚にひれ伏しなさい。祈りに頼り，神の慰めを受けなさい。(中略)人がこの世の報酬のためでなく，神のために無知なる人に教え，罪人を回心させ，悲しんでいる人を慰め，絶望している人を神にふたたび戻すならば，その人は聖霊と一緒になり霊的な神である。(中略)さて，愛する友よ，まだ，あなたが入念に警戒しなければならない二つのことがある。なぜなら，それは決して聖なる実りをもたらさないからである。第一は，男性であれ，女性であれ高位の聖職者に選ばれるために，よい行ない，よい実践を行なうことである。(中略) 第二は，人が賞賛されてさして根拠もなく選ばれたとき，人が変わって，この選ばれたことから決して止めようとしない〔で居座ってしまう〕ことである。(後略)。

ここからは，「男性であれ，女性であれ高位の聖職者に選ばれるために，よい行ない，よい実践を行なう」者が存在したことが窺える。まさにメヒティ

ルトの当時，聖職を売買するような土壌が充分に育っていたのである。

最後に第6部第21章「悪い聖職者たちはいかに辱められるか，〔説教者はいかに説教し，司教はいかにあるべきか，〕最後の兄弟たちについて」[16]には次のようにある。

> ああ，悲しいかな，聖なるキリスト教徒の冠よ，なんとあなたの輝きは汚れたことだろう。あなたの宝石はキリスト教の信仰を害し傷つけているゆえに，あなたから落ちてしまった。あなたの黄金は不純な泥沼で腐敗している。なぜなら，あなたは零落し，真の愛をもたないからである。あなたの純潔性は飽くことのない貪欲な炎で燃えつきてしまった。あなたの謙虚さはあなたの肉欲の沼に沈んでしまった。あなたの真理は世の虚偽で無になってしまった。あなたのすべての徳の花はあなたから散ってしまった。ああ，聖なる聖職者の冠よ，なんと悲しいこと。どうしてあなたは消えてしまったのか。あなた自身の殻，つまり，聖職者の権力しか残っていないではないか。これを〔武器に〕，あなたは神と選ばれた友に対して戦っている。それゆえ，あなたが知らない間に，神はあなたを卑しめよう。なぜなら，わたしたちの主は，「わたしはローマの教皇の心を大いなる悲しみで満たそう。このように悲しみながら，彼に話し掛け訴えたい。エルサレムのわたしの羊飼いは人殺しと狼になってしまったと。なぜなら，彼らはわたしの目の前で白い小羊を殺したからである。この老いた羊はすべて死の病にかかっている。というのは，高い山に生える健全な牧草を，――つまり，これは神の愛と聖なる教えであるが――食べないからである。地獄への途を知らないものは，腐敗した聖職者を眺めるがよい。彼らの人生が，妻子とともに，他のはっきり分かる罪を負って，いかにまっすぐに地獄へ通じているか〔見るがよい〕。(中略)。「若い教皇よ，あなたがこれを成し遂げてほしい。そうすれば，あなたの人生を長くすることができよう。あなたの前任者は短い生涯であった。なぜなら，彼らはわたしの隠れた意志を実行しなかったからである」。

ここでは「聖なるキリスト教徒の冠」なる教皇の堕落が嘆かれている。「徳の花はあなたから散ってしまった」と言われざるを得ない教皇には，まさに「聖職者の権力しか残っていない」のである。これまた，当時，聖職売買のための充分な環境ができあがっていたことを充分に物語っている。

3．2　マイスター・エックハルトの場合

エックハルトの説教には，聖職売買を批判する言葉も見られる。ラテン語説教第25番（254節）を引用しよう[17]。

「（前半略）事物の価値は形相に由来する。恩寵よりも，よりいっそう価値あるものがあるであろうか。『人はその価値を知らない』（ヨブ記28章13節）。それゆえに，聖職売買の不正が呪われているのである。というのは，それは恩寵をその金銭的価値によって測るものであるからである。トマスは教えている。或る一人の人間の恩寵の完全さは，（天と地の創造よりも）優る。何が恩寵よりもよりいっそう価値のあるものであろうか。(ex forma est rei pretiositas. Gratia quid pretiosius? Iob 28: 'nescit homo pretium eius'. Propter quod damnatur simoniaca pravitas, quae gratiam pretio aestimavit. Thomas docet quod perfectio gratiae uniuscuiuslibet hominis praeponderat etc. Gratia quid speciosius?)」

ここでは，使徒言行録の魔術師シモンに言及するよりも，ヨブ記28章13節の『人はその価値を知らない』という言葉が引用される。そして聖職売買こそは，その人間には測り知りがたい価値としての神の「恩寵をその金銭的価値によって測る」行為として，その「不正が呪われている」とされている。

4　聖職者の知の独占に関する批判

メヒティルトにもエックハルトにも，当時の教会支配体制の階級制度そのものを揺るがすことになるような発言もあった。それを見てみたい。

4．1　マグデブルクのメヒティルトの場合

まずメヒティルトの『神性の流れる光』第2部第26章より引用する[18]。

〔魂〕

「ああ，主よ，もし，私が学識のある聖職者で，／あなたがこの聖職者に唯一の偉大な神秘で働きかけられるなら，／あなたは永遠の栄光をその代わりにお受け取りになるでしょう。／けれども，主よ，今や誰が信じるでしょう。／あなたが汚らわしい泥沼に／黄金の家を建て，／そのなかに，あなたの母，すべての被造物，／そしてすべての天の召使いたちと一緒に，ほんとうに，住んでおられると。／主よ，この世の知恵はあなたを見出すことはできません」。

〔神〕

「娘よ，多くの賢い者らは不注意から，／広い大通りにある高価な黄金を見失う。／彼らはその黄金によって，上級の学校へ進めたものを。／今や，誰かがこれを見出さねばならない。／多くの日々，私は自然に以下のようにやってきた。／私が特別な恩恵を与えるときは，常に，／最も低いところ，最も小さい，最も隠された場所を探し求めた。／最も高い山は私の恩恵の啓示を受けられない。／なぜなら，私の聖霊の洪水は自然に谷へと流れるのだから。／書物を著す多くの賢い巨匠を人は見出すけれども，／私の目の前では，ばか者にすぎない。／そして，私はあなたにもう少し言う。／無学な者の口が学識ある者に私の聖霊により教えることが，／大いなる栄光であり，聖なる教会を完全に強めるのだと，そのようなばか者達の前で私には思える，と」

この引用のうち，我々にとっては特に次の箇所が重要である。「書物を著す多くの賢い巨匠を人は見出すけれども，／私の目の前では，ばか者にすぎない。／そして，私はあなたにもう少し言う。／無学な者の口が学識ある者の舌に／私の聖霊により教えることが，／大いなる栄光であり，聖なる教会を全く大いに強めるのだと，／そのようなばか者達の前で私には思える，と」。ここでは，いわゆる聖職者が「ばか者（ein Tor）」としてこき下ろされてい

る。そして，いわゆる無学な者が学識ある者に聖霊によって教えるようになることが，教会を強化するのだと，言うのである。

4．2　マルグリット・ポレットの場合

次にマルグリット・ポレット（Marguerite Porete＝？—1310）の場合を見てみたい。マルグリット・ポレットの著『単純な魂の鏡』の冒頭の一節を引くだけで，何故彼女が殺されたかは明白であろう(19)。

この本を読もうとしているあなたよ
もしあなたが本当にこの本の内容を把握したければ，
あなたが言うことについて考えなさい。
何故なら，この本を理解するのは非常に難しい。
知識の宝庫の管理人にして，
その他の美徳の母である謙遜が，
あなたに追いつかねばならない。

神学者やその他の聖職者達よ，
あなた方には，この本を理解するための知性がない。
たとえどんなにあなた方の能力が光り輝いても，
もしあなた方が謙虚に進まないならば，だ。
そして，愛と信仰は，共に，あなた方をして理性を乗り越えさせてくれる。
（以後）愛と信仰は理性の家の貴婦人である。

『単純な魂の鏡』冒頭

「知識の宝庫の管理人」である「謙遜」を身に付けなければ，読者はポレットの語る神秘の言葉は理解できないとした後で，舌鋒は鋭く神学者や聖職者達に向かっている。「愛と信仰は，共に，あなた方をして理性を乗り越えさせてくれる。（以後）愛と信仰は理性の家の貴婦人である」と言うのである。これは強烈な聖職者批判である。男の聖職者達に理解できない、女にだけ理解出来る福音の内容を宣教するのだという，マルグリット・ポレットの明確な

自覚がここから読み取れる。聖職者達の傲慢を鋭く指摘するポレットの言葉には，メヒティルトの聖職者批判と同じ響きがあったと言えよう。

4．3　マイスター・エックハルトの場合

最後に，マイスター・エックハルトの場合を見てみたい。エックハルトは，その説教の中で学者や聖職者の言葉に言及することが多い。その場合，二つの方向がある。一つは，当該の学者や聖職者を信頼し説教に引用し，彼等の考え方に依拠して説教を展開する場合。アリストテレス，ベルナルドゥス，アルベルトゥス・マグヌス，トマス・アクィナス，アウグスティーヌス，アヴィケンナ，ボエーティウス，プロクロス等の名があげられよう。その例として，ドイツ語説教第8番を読んでみよう。「剣で切り殺された」というヘブライ人への手紙11章37節を読み上げてから始められたこの説教の第二段落は次のようである[20]。

> さて，「彼らは死んだ」と〔ヘブライ人への手紙の記者は〕いっている。彼らが死んだという第一の意味は，この世で，この身体でどんな苦しみにあっても，それには終りがあるということである。聖アウグステイヌスによると，一切の苦しみと苦難の働きには終りがある，が，神がそのために与える報いは永遠であるという。私たちが考察しければならない第二のことは，この生のすべては死すべきものであるから，私たちを襲う一切の苦しみ，苦難を恐れてはならない，なぜなら，それには終りがあるからである。

ここでは，アウグスティーヌスの「一切の苦しみと苦難の働きには終りがある」という言葉が引用され，エックハルトはこの言葉を苦難を恐れるべきでないことの根拠にしているのである。

また，先のヘブライ人への手紙の言葉の第四の意味を説明するに際してエックハルトは次のように言う。

> ある学者がこういう。自然は何かを破壊すると，必ずよりよいものを生

み出すものである。空気が火になるとき，それはよりよいものである。しかし，空気が水になるとすれば，それは破壊で，常軌を逸している。自然がこのようなことをなすのだから，神はこれよりはるかに多くのことを行なう。神はよりよいものを与えないで，決して破壊することはない。殉教者たちは死んで，命を失ったが，存在を受け取った。(21)

ここで「学者」と呼ばれているのは，エックハルトが若き日にその教えを受けたケルンの碩学アルベルトゥス・マグヌスである。エックハルトは尊敬の念を持って，信頼してその考え方を引用しているのである。

続いてエックハルトが引用するのはトマス・アクィナスである。

学者は，もっとも高貴なものは存在，生，知識であるといっている。知識は生や存在より高い，なぜなら認識するという点で，生や存在をもつからである。しかし，これに対し，生は存在や知識より高貴である，つまり，木は生きている，他方，石は存在しかもたないからである。ところで，私たちは存在をそれ自体として〔本質として〕あらわに，純粋にとらえるならば，存在は知識や生よりはるかに高い，なぜなら，存在があることにより，〔同時に〕知識や生をもつことになるからである。彼ら〔殉教者〕は一つの生命を失って，一つの存在を得たのである。(22)

説教第8番は，以上のごとく学者の説の引用に満ちている。エックハルトはそれらの学者達を信頼しつつ対話的に説教を展開しているのである。

しかし他方，エックハルトが当該の学者を愚かなものとして批判的に取り上げている場合もある。ドイツ語説教第22番から引用してみよう(23)。

昨日，学校で神学の碩学たちの間である問題が討議された。そこで，私は「聖書は内容が豊かであるのに，誰もその最も小さな語すら充分に理解できないのは不思議である」といった。

ここでは，聖書の豊かな内容をほんの少しも理解できないものとして「神

学の碩学たち」が槍玉に挙げられている。同じトーンの言葉はドイツ語説教第29番にもある[24]。

「正しく学び偉大な聖職者でありたいと望む多くの聖職者どもが，非常に早く満足し，そして幻惑され，そして主が語られた言葉を厳しく叱りつけるということが，私を驚かせる。(Nun wundert's mich bei manchen Pfaffe, die recht gelehrt und grosse Pfaffen sein wollen, dass sie sich's so schnell genugen lassen und sich betoren lassen und das Wort hernehmen, das unser Herr sprach.)」

ここでは，聖職者 (Pfaffen) が批判の対象となっているが，構造は同じである。この引用文の中で「非常に早く満足し，そして幻惑され」という言葉こそ，エックハルトがどういう種類の学者や聖職者を批判したかを知る手懸りとなるであろう。すなわち，真理に対する探求心を失い，知的権威としての己が立場に安住する者を，エックハルトは批判するのである。

また『神の慰めの書』の最終段落に言う。

異教の師であるセネカは言っている。「ひとは宏遠で卓越した事柄については，宏遠で卓越した心と，崇高な魂で以って論ずるべきである」と。また「このような教えを無学な人人に向って話したり書いたりすべきではない」といぅ人もいることであろう。それに対して私は次のように言おう。もし学の無い人たちを教えるべきではないといぅのであれば，その場合には何びとたりとも教えを受けるということができなくなり，且つまた何びとたりとも教えたり書いたりすることができなくなるのだ，と。なぜかというと，学の無い人たちが学無き人であることから学の有る人になるために，ひとは学の無い人人を教えるのであるから。もし新しいものがひとつもないとするならば，何ものも古いものにはならない，ということになるであろう。「健康な人は医者を必要としない」とわれわれの主は言っている。医者といぅものは病人たちを健康にするために存在している。しかしもし誰かがこの言葉を曲解するようなことがあると

しても，そういう人に対して，この正しい言葉を正しい仕方で述べている者には一体何ができるのであろうか。聖ヨハネは聖なる福音をすべての信者たちにも，すべての不信者たちにも宣教して，不信者たちが信仰をもつものとなることを願ったが，しかしそれでも彼は，一箇の人間として此の世で神について陳述しうる最高の事柄で以て，その福音を開始している。そうしてやはり彼の言葉も，またわれわれの主の言葉も，しばしば正しい仕方では理解されなかったのである。

愛に満ち，慈悲深くて，真理そのものにまします神よ，願わくば私ならびに此の書物を読むであろうすべての人に，われわれがわれわれの内に真理を見出し，それに気づくようにさせ給え。アーメン。(25)

上記のうち，我々にとっては次の部分が重要である。「もし学の無い人たちを教えるべきではないというのであれば，その場合には何びとたりとも教えを受けるということができなくなり，且つまた何びとたりとも教えたり書いたりすることができなくなるのだ，と。なぜかというと，学の無い人たちが学無き人であることから学の有る人になるために，ひとは学の無い人人を教えるのであるから」。エックハルトはここで，無学な人々に教えることを拒否する聖職者を意識している。それはセネカの言葉を引用した上で語られた冒頭の次の言葉からも明らかであろう。曰く，「また『このような教えを無学な人人に向って話したり書いたりすべきではない』という人もいることであろう」。「このようなことをいう人」とは当時の聖職者に他ならない。聖職者の知の独占は，彼等の権力の確保につながる。メヒティルトやエックハルトの言葉は，その点を撃っている。

結　び

我々はメヒティルトとエックハルトの聖職者批判的言辞を，それぞれの著作の言葉から探ってきたが，その聖職売買を中心にした批判には同じ響きがあったと言えよう。

ところで，ゲルト・タイセンはその著『イエス運動の社会学』において，原

始キリスト教の巡回霊能者のエートスとして，「故郷の放棄」と「家族の放棄」に続けて，「財産の放棄」を取り上げ，次のように言っている。「原始キリスト教の巡回霊能者の第三の特徴は，富や所有に対する批判的な態度である。明らかに貧しい者が，すなわち，お金や靴や杖や貯えなしに，ただ一枚の着物を身につけて，パレスチナやシリアの通りを巡り歩いていた者（マタイ10.10）だけが，不信を招くことなしに，富や所有を批判することができた。(中略)。ここで，貧困は，ただ単に運命であっただけではなくて，むしろ課題であった（G・タイセン著，荒井献・渡辺康麿訳『イエス運動の社会学』，ヨルダン社，1981年，34—36頁)」。この原始キリスト教の原点を，今回我々が取り上げたメヒティルトやエックハルトの言葉は思い出させてくれる。しかし，それだけではない。時は，13世紀から14世紀にかけての，場所はドイツである。貨幣経済の勃興は世を覆い尽くしつつあった。生計や教育や自由の権利をめぐって，男性による女性抑圧が問題視されつつもあった。聖職者の知の独占に関するメヒティルトによる批判は，自ずから女性の教える権利の主張であった。また同じく聖職者の知の独占に関するエックハルトの批判は，教える者となる女性をエックハルトが意識的に育てようとしたことの証拠であるとは言えないだろうか。

次にメヒティルトとエックハルトの聖職売買批判は，福音の本質を見失いつつあった当時の教会権力への批判であった。それは，世俗の文学にも現れていた批判であった。その批判の証のようにベギン運動は展開され，エックハルトはその運動が福音に深く根差していることをメヒティルトの影響をも受けつつ看取し，親しく関わったのである。それが，キリスト教の知を独占して権力と癒着した当時の教会当局の異端審問という迫害を招いたのは，当然の成り行きであった。当時の高位聖職者にとって，女性（無学な者）が教えを受けた結果として教える者となることほど，危険なことはなかったであろうからである。

エックハルトの「聖職売買」を批判する言葉を読むと，そのドイツ語説教における「貧」の強調が，抽象的，哲学的な「貧」についての単なる思惟ではなく，原始キリスト教が巡回霊能者の課題としていたような「貧」の強調であったことがうかがえる。ベギンが追求した vita apostolica もまた，その

ような徹底した「貧」を前提とした生活であった。己が生命の維持を神に任せて，働きつつ「貧」であり続ける道を都市の直中でベギンは追求した。聖職売買こそは，そのような「貧」の対極に位置する行為の最たるものであった。エックハルトがベギンの生き方に共鳴していたことは，メヒティルトとエックハルトの「聖職売買」をめぐる発言の共通点からしても，明らかであろう。

メヒティルトもエックハルトも，単なる聖職売買等の批判に留まらず，当時の教会支配体制を根本から揺るがす方向性を持っていたと言えよう。また，ドミニコ会の Vicar として女子修道会や女性を中心とした一般信徒の教導をドミニコ会総長から信頼をもって任されていたエックハルトが，今回見てきたような教会体制の根本的な部分に対する批判を持っていたということ自体，エックハルトが異端として審問された真の理由であろう。エックハルトが，教会当局からベギンを教導するように命じられておりながら，視察者(Visitor)としての立場も含みつつ訪れたベギン館で，むしろベギンを肯定したのも，今回見てきたようなその聖職売買や聖職者の知の独占を批判する言葉からすれば当然であった。

(本稿は2000年9月16日から17日にかけて上智大学で開催された「キリスト教史学会第51回大会」において，「マグデブルクのメヒティルトとマイスター・エックハルト——その聖職者批判——」と題して口頭発表した原稿に加筆したものである。)

註

1 McGinn, Bernard. Meister Eckhart and the Beguine Mystics: Hadewijch of Brabant, Mechthild, Continuum, 1994

2 Ibid., p.46.

3 Oliber Davies.Meister Eckhart: Mystical Theologian, London: SPCK, 1991, pp.59-60.

4 McGinn, Bernard.The flowering of mysticism men and women in the new mysticism 1200-1350, The Presence of God: a history of Western Christian mysticism; Vol. 3, Crossroad, 1998

5　ハルトマン・フォン・アウエ著，『ハルトマン作品集』，郁文堂，1982，220頁。

6　ダンテ著；平川祐弘訳，『神曲』，世界文学全集　3－3，河出書房新社，1966。

7　ボッカチオ著；野上素一訳，『デカメロン：十日物語』／岩波書店（岩波文庫），1976，183—184頁。

8　ジョバンニ・ボッカッチョ著；柏熊達生訳，『ボッカッチョ　デカメロン（世界文学全集　1）』，河出書房新社，1961，3—5頁。

9　ウィリアム・ラングランド著；池上忠弘訳，『農夫ピアズの幻想』，中央公論社（中公文庫），1993年，34—35頁。

10　H・デンツィンガー編　A・シェーンメッツァー増補改訂　浜寛五郎訳，『カトリック教会文書資料集　信経および信仰と道徳に関する定義集．改訂4版』，エンデルレ書店，1992，191頁。

11　Sancti Thomae Aquinatis / Summa theologica cura fratrum eiusdem ordinis. / t. 3: secunda secundae / Matriti: La Editorial Catolica, 1951, pp.661-666.

12　マグデブルクのメヒティルト著；植田兼義訳，『中世の女性神秘家　I』（キリスト教神秘主義著作集I／4），教文館，1996，125頁。

13　同書，126頁。

14　同書，171—171頁。

15　同書，203—208頁。

16　同書，229—230頁。

17　マイスター・エックハルト著；中山善樹訳註，『ラテン語説教集—研究と翻訳』，創文社，1999，267頁。

18　マグデブルクのメヒティルト前掲書，70—71頁

19　Marguerite Porete; translated and introduced by Ellen L. Babinsky; preface by Robert E. Lerner. / The mirror of simple souls / New York: Paulist Press, 1993. p. 79より私訳。

20　マイスター・エックハルト著；植田兼義訳，『エックハルト　I』（キリスト教神秘主義著作集6），教文館，1989，48頁。

21　同書，49頁。

22　同書，49頁。

23　同書，116頁。

24　Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 2. Die Deutschen und Lateinischen Werke: W. Kohlhammer Verlag, 1988, S.83を私訳。

25　マイスター・エックハルト著；川崎幸夫訳，『エックハルト論述集（ドイツ神秘主義叢書　3）』（上田閑照，川崎幸夫編）；3，創文社，1991，65—66頁。